

五 遊ぶ子供

舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば 馬の子や
牛の子に蹴ゑさせてむ 踏み破らせてむ ま
ことに美しく舞うたらば 花の園まで遊ばせ
む

松の木かげに立ちよりて 岩もる水をむすぶ
間に 扇の風も忘れられて 夏なき年とぞ思ひ
ぬる

池の涼しき汀には 夏のかげこそなかりけれ
こだかき松を吹く風の 聲も秋とぞ聞えぬる

遊をせむとや生まれけむ たはぶれせむとや
生まれけむ 遊ぶ子供の聲きけば 我が身さ
へこそゆるがるれ

佛は常にいませども 現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉に ほのかに夢に見え給ふ

〔出所〕 梁塵秘抄
二十卷
平安時代末期
に成つた歌謡
集
後白河法皇御
撰